

# 「戦後池袋—ヤミ市から自由文化都市へ—」展示企画展報告

石 川 巧



図版 1

## 1 はじめに

敗戦から七〇年の節目を迎えた二〇一五年、立教大学は東京芸術劇場、豊島区との共催で《池袋Ⅱ自由文化都市プロジェクト》を立ち上げ、同年九月、東京芸術劇場ギャラリーにおいて「戦後池袋の検証—ヤミ市から自由文化都市へ—」という展示企画を開催した。

戦前の池袋周辺は、多くの画家、音楽家、詩人たちが集う芸術活動の場だった。成蹊学園、立教学院、自由学園などがキャンパスを構える自由教育の拠点であった。詩人の小熊秀雄が、

池袋から長崎町にかけては、芸術家と称される種族

が住んでゐる。それと並行的にダンサー、キネマ俳優など消費的な生活者に、無頼漢、カトリック僧侶など異色の人物を配し、サラリーマン、学生等が氾濫してゐる、地方人の寄り集りであるこの植民地東京の中でも最も人種別においてバラエティーに富む池袋付近は、従つて東京人の精神的機構を語る材料がタツプりある。なかでも神経質をもつて売物とする芸術家の生活において、脳の働きと心臓のチックタックの状態が醸し出す不思議な雰囲気は恰も巴里の芸術街モンパルナスを彷彿させるものがある。……遠く池袋の空が夜の光りを反映して美しく見える頃、画家達はパチリパチリとアトリエの電灯を消して長崎町から、池袋へ出かけて行く、特別の用事があるわけではなく、ただ遠くの手がさし招くままに、足がふらふらその方向に向いて行くのである。

と記したように、池袋の街にはロマンチズムの気風が漂い、雑多な人々が自由に往来していた。

しかし、一九四五年四月一三日の城北大空襲によって豊島区域は焦土と化す。区域全体の七割が消失し、被害は死者七七八人、負傷者二、五二三人、消失家屋三四、〇〇〇

戸、罹災者一六一、六六一人に及ぶ。そうしたなか、いち早く復興の烽火<sup>のろし</sup>をあげたのは、バラック建て長屋やゴザ敷の露天商が集うヤミ市であった。敗戦後の混乱した社会状況のもとでは食糧や生活物資の配給を充分に受けることができず、庶民は窮乏に喘いでいたが、この自由マーケットが基点となつて街に活気が甦つていったのである。

ヤミ市は、敗戦後の混乱した社会を映し出す無法地帯として表象されることが多く、暴力、搾取、犯罪の温床というイメージが付着している。だが、実際のヤミ市は混沌であると同時に人々に生きることの喜びを取り戻させるエネルギーの源泉であった。公権力によつて発動される秩序や統制を易々と拒絶し、雑多なものが移動・交流する空間のなかで人々が主体的に共存の原則をつくりだすような仕組みをもっていた。

最盛期、池袋の東口には一、二〇〇軒を越える連鎖商店街が広がっていた。西口にもそれに近い規模の連鎖商店街があり、一九五〇年の朝鮮戦争にともなう経済復興の波が押し寄せたあともマーケット営業が続けられ、一九六二年に東京オリンピックに向けて推進された区画整理事業で取り壊されるまでその面影が残存していた。

また、この街には戦後漫画の騎手である手塚治虫や藤子

不二雄が集った。江戸川乱歩や大下宇陀児といった探偵小説作家が居を構え、人吉坐やロサ劇場といった映画館が人々を魅了した。その意味で、日本の大衆文化、サブカルチャーは武蔵野の郊外を背地とする池袋の復興とともに開花したといえる。

現在の池袋は、自立した文化風土と開放性を併せ持ち、未来への希望をつなぐ子どもたちをサポートする地域住民の活動において大きな成果をあげている。近年では、もともと住みたい街のひとつとしても高い評価を受けている。この街には、地域への愛着に支えられたローカルズムと世界に向けて活気あふれる文化を発信していこうとするグローバルズムが綜結しているのである。——こうした戦後池袋の変遷を考えるために、東京芸術劇場での企画展では二つのスペースを使って展示を行った。以下、その概要を紹介する。

## 2 展示室1

展示室1では、戦災で壊滅的な被害を受けた池袋の復興と巨大繁華街の誕生を検証するために、(一)東京ヤミ市マップ、(二)ヤミ市とその実態、(三)灰の中からの脱出——城北大空襲後の暮らし——、(四)戦後池袋の光景①G

HQ占領期、(五)戦後池袋の光景②復興から高度経済成長期へ、(六)カストリ雑誌、(七)戦後マンガ文化、(八)人吉坐(一九四八—一九六八)——人の世をうつした映画の光——というコーナーを設け、それぞれの担当責任者が独自の展示を行った。

入口近くには、一九四五年にGHQが新宿の伊勢丹・三越周辺を撮影したカラー写真(【図版2・奥】ジェターノ・フェーレス撮影/PPS通信社提供)を掲げた。当時の記録を見ると、池袋と新宿のあいだはほとんど焼野原であり、池袋の平地から伊勢丹が見えたという。また、作家の山田風太郎が『戦中派不戦日記』(一九七一年、番町書房)に「新宿駅前より牛込の方へ焼野の中を歩いて見る。何処までいっても赤茶けた焼けトタンの海(中略)。太いなるビルも窓枠焼けガラス溶けて、火災内部を荒れて通りしか、黒きがらんだ姿あたたかも巨人のミイラのごとし」(同五月一日)と記しているように、その光景は戦後日本の惨めさそのものであった。

また、同じコーナーには同じく戦後にGHQによる池袋周辺の空撮写真(【図版2・手前】一九四七年八月八日撮影)を巨大パネルにして展示した。建物の多くが瓦解しているなか、東口の巣鴨ブリズンと西口の立教大学だけが輪



図版 2

郭を保ち、幹線道路がくつきりと浮かび上がるその空撮写真を見た見学者のなかには、当時住んでいた地域を指先で懸命になぞりながら、誰彼となく自分の記憶を語り始める老人もいた。

入口近くの壁面には池袋にあった連鎖商店街の分布とともに、具体的な店舗イ

ラストとその解説を掲げ、ヤミ市の様子を疑似体験してもらった。ここでは、その代表例としてパチンコ店、あんみつ屋、本屋、焼きトン屋を紹介する（引用は星野朗・松平誠『池袋『やみ市』の実態——第二次世界大戦後の戦災復興マーケット——」、「立教大学社会学部研究紀要 応用社会学研究」第25集・一九八四年より）。

潜水型パチンコ店……玉10個で10円。1人平均20円分買って20分位で出ていく。景品はたばこのピース。当時1箱10円。夫婦でやっていたが、台のなかへ、常時1〜2人は入っていないからなので、一時人を

使ったこともある。開店は8時乃至10時だが、午後から夕方が一番込む。

あんみつロビン……1コマ1間×1間。権利金は1万円だった。腰掛は円形の木製椅子4つ。そのほかの客は立ち食い。壁は大きなベニヤ張り。屋根はトントン葺き。商品はあんみつ（芋餡にサッカリン、ズルチンを入れ、色素を加えたあんこを使う。蜜は芋蜜。当初1杯10円ではじめて、15円に値上げした。その他の商品としては、みつまめ10円、オレンジジュース30円、冷牛乳10円、かき氷10円など。売り上げは多い日で1万円位あった。

本屋……当時、新刊本の定価は高いもので5円（普通は1〜2円）。それを下取りして売れ行きのよいものは2円定価のものを1円から1円50銭で売る。本を売りに来る客には住所を確認する。売り手よりも買い手の方が多く、それでも書き手は日に5〜7人で細々した商売だった。開店午前10時、閉店午後5時。学生と公務員がよく立ち寄った。

焼きトン福島屋……燃料は木炭。焼鳥に使うほか、七輪を道路に出して簡単な煮炊きをする。商品は焼鳥（白、ハツ、レバー、ナンコツ）、ビール、日本酒、豆

類、ゆで卵、たれは自家製。ビールと卵はヤミ屋から仕入れていた。売り上げは1日三〇〇〇円位。店員は夕方から夜の12時まで働いていたが、店主はその後も店を開けていた。常連客が多く、呼び込みはいらなかった。宝焼酎が1杯20〜30円、南京豆1袋10円、店員の給与は1日100円宛のほか、客の支払った金のうち小銭をもらっていた。

(一)〈東京ヤミ市マップ〉のコーナーには、都心の戦災焼失区域、疎開区域が色付けされた「帝都近傍図」が多くの人々を立ち止まらせていた。解説を担当した初田香成氏（東京大学助教）によれば、「闇市は東京のほぼ全域に出現し、多くが戦中に設けられた駅前の疎開地や戦災焼失地に立地した。闇市の最盛期と言われる一九四六年四月時点の調査によると、都内の合計一七九の露店設置箇所に一八、四三九店の露店が営業していたという（実際の数はさらに多かったと考えられる）。露店数が一、〇〇〇を越える大規模な闇市として新宿駅西口、蒲田駅西口、上野広小路、浅草公園地帯があり、区別には台東区、新宿区、大田区、世田谷区、杉並区、豊島区などに多かった」とのことである。

(二)〈ヤミ市とその実態〉では、池袋駅周辺のヤミ市地

図が展示されたが、同コーナーの解説を担当した石樽督和氏（明治大学助教）は、その特徴を「池袋駅周辺は一九四五年四月十三日の大空襲で焼き尽くされた。この日、雑司ヶ谷や池袋で早めに避難できた人々は長崎方面に逃れた。一方、逃げ後れた人の多くはコンクリート造の防空壕が数カ所つくられていた根津山に避難した。／池袋駅周辺では西側の住宅地が焼け残った。こうした地域は、戦後に間借りなどで人口が増え、徒歩で池袋駅周辺おマーケットへ来る人々が多く住んだ。これが西口のヤミ市が西側へ伸びるように発展する、一つの要因となる」と指摘している。

また同氏は、西口駅前にあった豊島師範学校の焼跡が大規模マーケットの形成を促したとし、「元都議会議員が被災者、引揚者の救済施設を作るという理由で、同地の一部を使用する許可願いを当時の土地所有者であった文部省に提出し受理される。これがきっかけとなり、複数の主体が同地の使用願いを提出し、受理されることとなった。この文部省の許可をきっかけに同地には大規模なマーケットが建設された。豊島師範学校の土地は一九四八年三月末までという使用期限つきで借地されることとなっていたが、それ以降一九六二年末に整理が完了するまでこれらのマーケットは存続することとなる」と説明している。

(三)〈灰の中からの脱出——城北大空襲後の暮らし〉は、一六歳のときに城北大空襲を体験し、戦後、その記憶を〈忘れられない空襲体験、戦中・戦後の日々の暮らし〉連作をはじめとする数多くのスケッチ画にできた矢島勝昭氏（一九二九年、東京生まれ。画家、郷土史家）の作品から十二点を展示した。矢島勝昭氏は自身のwebサイトのなかで、当時のヤミ市の様子を「露店の闇市がバラック建てに変わっても、食い物の店はやはり繁盛。うどんやそば、天ぷら、煮込み、モツ、焼き鳥、お汁粉……、値段は安いものはなかったが、作ったものは何でもよく売れた。砂糖は貴重品で、甘味はサッカリンとズルチンの時代だった。店舗は一間半×二間の広さで二、〇〇〇円くらい。数区画を借りて内緒で製麺所兼倉庫にして商売していたものもあった」と語っている。

(四)〈戦後池袋の光景①GHQ占領期〉のコーナーでは、東口ヤミ市の全景を捉えた写真や終戦直後における東武鉄道の電車風景をはじめとする貴重な写真パネルを展示した。戦後の池袋駅周辺は、東口・西口それぞれにヤミ市が広がる一方、一九四五年十一月の武蔵野デパート（一九四九年四月に西武百貨店に社名変更）、一九五〇年二月の東横百貨店（一九六二年、隣接地に東武百貨店が建ったこ



図版3

である（図版3）。丹羽文雄が小説『蛇と鳩』（一九五三年、朝日新聞社）のなかで、「池袋の東側は、緒方も一、二度来たことがあるが、西側は初めてであった。東横デパートが一と際鮮やかに西側に君臨していた。新しく明るい改札口、国電切符売場、飾窓、近代風な部分はことごとく東横デパートの中に限られていた。それにつづいた道路は、汚なくてせまかった。雨の日は泥んことなることだろう。うす汚れたマーケットが接していた」と描写したように、それは欲望のカオスそのものだった。

ヤミ市研究の嚆矢ともいえる松平誠（立教大学名誉教

とで経営が悪化し、二年後、東武百貨店に譲渡された）が次々にオープンしている。ここでは、きらびやかなイルミネーションに照らされる大規模百貨店と食糧や物資を買い求める人々がひしめくヤミ市が隣接する奇妙な空間が現出しているの



授)は、『ヤミ市ガイドブック』(ちくま新書、一九九五年七月)のなかで、池袋ヤミ市の特徴を以下のように分析している。やや長くなるが、極めて重要な指摘と思われるのでその論旨を引用する。「池袋ヤミ市もまた、上野同様、食料品の生産地を控えたターミナルとして出発し、盛り場に発展したものである。この場合の食料品とは、関東ローム層の高台にある農村から産出される野菜類、そして甘藷であった。戦前の表側だった池袋駅東口には、現在駅前広場になっている一九、三八〇平方メートルの広大な焼け跡があり、戦後すぐに格好の青空市場がつけられた。当時裏側だった西口も一面焼け野原で、現在東京芸術劇場が建っている旧豊島師範学校跡や、駅前ビル街になっている三角地帯は、すべて露店市場となっている。／池袋露店商組合支部が、この東口に東京で最初の木造長屋マーケット、名付けて「池袋連鎖市場」をつくったのは、一九四六年三月のことである。(中略)一九四七年ははじめから春頃には、全体が道路で三つの群に分かれ、整然と配置されている。飲食店が半数、しかもその大部分は呑み屋である。食料品を売るものが九・三%、衣料、靴の店が五%、その他が一〇・三%、これらを合わせても四分の一にしかない。／池袋東口のマーケットは、東京都露店商組合が、戦後の混乱

期からの脱却を狙い、露天商としての生き残りを賭けて知恵を絞ったボランタリーチェーン構想を、都内ではじめて実現したものである。これはアメリカの小売業者のシステムを参考にしたもので、商品の共同仕入、適正価格の査定、不正の処置、組合員の共済・厚生などを目的に、連鎖式の商店街をつくりだそうとするものであった。実際には、「組」組織の体質や、占領軍の政策、物価統制令による営業停止などによって、ほとんど機能しなかったが、池袋東口にできた連鎖市場に倣って、主要駅前に木造の連鎖式市場、つまりマーケットがぞくぞくとできあがり、ヤミ市の体裁が一変するのである。(中略)／西口は、規模としては東口よりも大きく、池袋戦災復興マーケットだけで、九、一三一平方メートルもある。このマーケットは五一〇のコマからなり、年代は少しずれるが、一九五〇年の立教大学の調査では、呑み屋が極めて多い。残りは飲食店と古着・古物商が多数を占めている(立教大学社会福祉研究室「池袋戦災復興マーケット実態調査」『HUMAN RELATIONS No.2』)。／もう一つ、上に挙げた池袋西口ヤミ市調査をみると、一九五〇年三月には、五一〇コマのうち営業店舗が三二五、そして住宅が一八二となっている。これについて同調査報告は、「かかるマーケット内に純然たる住宅がか

くも多数存在するのは二十二年の飲食店禁止令の施行により飲み屋が店閉いを余儀無くされた為、それに伴って飲み屋相手の商店も閉店の止むなきに至ったのでそれを一般人の住宅に貸したその名残りである。」／としている。ヤミ市化けて住宅となるというたいへん珍しい事実なので、付記しておく。」(以上、『ヤミ市ガイドブック』より)

(五)〈戦後池袋の光景②復興から高度経済成長期へ〉のコーナーでは、一九五〇年代以降の池袋が急速に変貌していく様子を貴重な写真パネルで紹介した。一九五四年に地下鉄丸ノ内線(池袋―御茶ノ水間)の営業が始まり、都心へのアクセスが容易になった池袋は、次第にターミナル駅としての規模を拡大していく。また、一九七一年から始まる首都圏整備計画により巣鴨ブリズンの跡地がサンシャインシティ(一九七八年開業)に生まれ変わったことも、池袋の変貌を考えるうえで重要な出来事であった。大型商業施設のほか、展望台、水族館などのアミューズメント施設、劇場、博物館などの文化施設、コンベンションセンター、ホテルなどが集約されたサンシャインシティは、その集客力のみならず、文化発信の基点として池袋発展の大きな原動力になったのである。池袋には、一九五一年開業の池袋演芸場、一九六九年に西武百貨店の資本参加でオープンし

たPARCO、東京都長期計画事業で整備された旧豊島師範学校附属小学校の跡地に誕生した東京芸術劇場(一九九〇年)など様々な文化発信の拠点があるが、サンシャインシティの誕生は、まさに巣鴨ブリズンの記憶を封印するという意味においても、池袋の都市イメージを大きく変える出来事だったといえるだろう。なお、(四)と(五)では、貴重な写真パネル約一〇〇枚を通して時代ごとの池袋を追ったが、いまでも当時の面影を色濃く残す場所については、過去／現在の写真を組み合わせた展示を行い来場者の注目を集めることができた(【図版4】)。



図版4

(六)〈カストリ雑誌〉

のコーナーでは、ヤミ市の文化から誕生したカストリ雑誌数千冊を床に敷き詰め、葦簾を活用したお祭りの縁日のようなアートディレクションで展示した(【図版5】、【図版6】展示会場を撮影した写真より)。敗戦により満洲、樺太、朝鮮など





図版 5



図版 6

にあった製紙・パルプ工場を失った日本は極度の紙不足に陥り、新聞・雑誌の印刷が困難になる。吉田敏和『紙の流通と平田英一郎』（昭和三八年三月、紙業タイムス社）が、「21年における紙・板紙・和紙の生産量は4億6千2百50万ポンドに落ちこみ、16年の33億3千8百万ポンドに対し14%弱と惨たんたるもので前途の見通しは全く立たなかった」と伝えるように、当時の日本は『紙飢饉』の状況だった。

一九四五年一〇月二六日、GHQは「用紙配給に対する新聞及び出版統制団体の統制の排除に関する覚書」を发出

する。だが、そうした統制にもかかわらず用紙の争奪競争は激しさを増し、大手出版社の多くは石炭や木材を製紙会社を持ち込むバーター制で急場を凌ぐことになる。資本力をもたない新興出版社の多くは、統制外のザラ紙、センカ紙、隠匿紙に飛びつき、粗悪な再生紙が巷に溢れる。一九四六年創刊の「りべらる」（大虚堂、※「りべらる」はインテリ向けの総合雑誌であり、厳密にはカストリ雑誌と呼ぶべきではないが、同時代の粗悪なセンカ紙で印刷された雑誌という括りでカストリ雑誌とひと括りにされることが多い）や「猟奇」（茜書房）を嚆矢とする大衆向けの娯楽・風俗雑誌はこうした風潮のなかで誕生し、活字に飢えた人々の欲望に応え続けることで飛ぶような売れ行きを示す。

カストリ雑誌の定義には諸説あるが、その多くは上記のようなセンカ紙を用いたB5の判型であり、三二頁〜四八頁立てであった。急速なインフレ時代ゆえ、価格は一〇円〜四〇円程度まで大きく変動するが、少なくとも日々の食糧入手に精一杯だった庶民にとっては高価な代物だったと思われる。昭和二〇年代後半に印刷用紙の生産が安定し、「夫婦生活」（昭和二四年六月創刊）をはじめとするB6判の夫婦和合雑誌が登場たことでカストリ雑誌は急速に減少していくが、占領期を通じて恐らく一、〇〇〇種類以上の

タイトルが発行されたといわれている。

カストリ雑誌の多くは、読物、娯楽、風俗、実話、話題、犯罪、探偵といったテーマを掲げており、記事の大半は読み切りだった。類似誌のなから選んでもらうためには表紙や見出しを煽情的にせざるを得ず、畢竟、内容はエロに傾いていく。昭和二五年頃になると女性のヌードグラビアが増え、より直接的なエロチシズムが追求されるようになるが、それ以前は挿絵と言葉による描写・表現が中心であり、記事や小説の書き手たちはいかにして読者の妄想を喚起するかを競った。だが、当時のカストリ雑誌は、回し読みしたうえで廃棄されるのが常だった。図書館はもちろん家庭においても、この破廉恥な雑誌を保存しようと考える人はほとんどいなかった。戦時中に禁欲的な生活を強いられていた人々にとって、鮮やかな原色で描かれた女体の色気はさぞかし喰<sup>くも</sup>るものがあつただろう。また、記事のほとんどがエロ・グロ系であることは事実だが、内容をつぶさに読むと、荒廃した社会・風俗を裏面から逆照射し、政治や権力のいかにがわしさを愚弄してみせる反逆性を併せもっていることがわかる。

(七)と(八)は、マンガと映画との関わりを通して、芸術・文化を愛する戦後池袋の気風に迫ろうとしたものであ

る。一九四八年にサンカ小説で有名な三角寛が人苜坐と文芸坐をオープンさせ、井伏鱒二、徳川夢声、吉川英治、永井龍男らの文士が株主に名を連ねる。戦後、四軒の映画館を営業していたROSAは一九六八年に複合娯楽施設ロサ会館をオープンさせ、池袋西口のランドマークとなる。野尻徹が創設したスタジオ・デ・ザールは舞台芸術学院に発展し、のちに山田洋次、伊丹十三、役所広司、矢崎滋、渡辺えり子などを輩出することになる。さらに、池袋には江戸川乱歩や大下宇陀児らが居を構えていたため、彼らを慕う多くの探偵小説作家がこの街を訪れた。

マンガ文化との関わりとしては、一九五三年に手塚治虫が入居したのをきっかけに多くの新人マンガ家たちが集ったトキワ荘がその象徴的な存在である。——ここでは、トキワ荘と池袋のマンガ文化に関して、同コーナーを担当した山田夏樹氏（法政大学助教）の解説を引用するかたちで紹介する。

手塚治虫が、戦後マンガの表現（映画的手法など）の全てを一から作ったわけではなく、実際には戦前のマンガからの連なりの中にあつたことは、近年の研究では明らかになりつつある。／しかしそれでも、戦時

の規制による途絶を経て登場した、酒井七馬構成・手塚治虫画『新宝島』（育英出版、一九四七年一月）の与えた衝撃は大きかったようである。それは四〇〇八〇万部とも言われる大ベストセラーとなり、後続する世代のマンガ家にも強い影響を与えた。／この『新宝島』の影響もあり、一九四八〇五〇年頃は正規のルートにのせずに販売される（赤本漫画）がブームとなるが、同時期の一九四八〇五一年は、児童向けマンガ雑誌が多数出版された時期でもある。幾つか挙げれば「漫画少年」（一九四八年一月創刊）、「冒険王」（一九四九年二月創刊）、「おもしろぶっく」（一九四九年九月創刊）などである。／中でも、投稿欄に力を入れ全国に多くのマンガ家志望を作り出していった「漫画少年」は、手塚の「ジャングル大帝」（一九五〇・一一〜五四・四）を連載し、東京でのデビューも果たさせている。加えて、東京に住まいをもたなかった手塚にトキワ荘（豊島区椎名町。現・南長崎）も紹介している。このことが次頁で述べるように有望な新人マンガ家が集う空間へと連なっていくのであり、更なるマンガ文化の進展を呼んでいくのである。／「漫画少年」を発行していた学童社の紹介により、手塚治虫がトキワ荘に入居

したのは一九五三年のはじめである。そしてその年の暮れに寺田ヒロオが入居し、そしてその年の暮れに寺田ヒロオが入居し、その後、手塚と入れ替わる形で一九五四年十月に藤子不二雄<sup>①</sup>、藤子・F・不二雄の二人が入居した頃より、トキワ荘は有望な新人マンガ家が集う空間へと変貌していく。具体的には、入れ替わりはあるものの、鈴木伸一、森安なおや、石ノ森章太郎、赤塚不二夫、よこたとくお、水野英子らが入居することとなる。／そして、このトキワ荘のマンガ家を中心として結成されたのが、新漫画党というグループ（一九五四年七月九日に党名決定。命名は藤子<sup>①</sup>）であり、寺田を中心に、先のメンバーらに加え、つのだじろう、園山俊二も名を連ねることとなる。／このようにトキワ荘は、後に大家となり、マンガ界を牽引することとなる存在を数多く輩出したため、半ば伝説化、神話化しているが、元々は先述の学童社が、有望な新人マンガ家を確保する意味合いもあったようである。そして学童社の倒産以降も、新たなマンガ家の入居や党への加入は、やはりメンバー内の厳格な決まりに基づいたようである。つまり意識的に有望な新人が集められていたのであり、そこでの更なる腕の磨きあい

が、結果的に大家の輩出へと連なっていたという指摘も、近年ではなされるようになってきている。／このトキワ荘時代は、石ノ森が一九六一年末に退去することで終焉するが（石ノ森のアシスタントであった山内ジョージは翌年三月まで居住）、トキワ荘という空間や、その契機となった「漫画少年」の理念自体は、その後もそれぞれのマンガ家人生に影響を与え続けることとなる。／例えば、朝日ソノラマ社が月刊誌を創刊する際、改めて「火の鳥」を連載することになった手塚は、誌名を「漫画少年」とするように要請したという（実際は「マンガ少年」として一九七六・九創刊）。他にも、周囲のマンガに絶望し一九七〇年代に筆を折った寺田は、状況への提言のように『漫画少年史』（湘南出版社、一九八一・四）を編纂、出版することとなる。一方で藤子④は「まんが道」愛：しりそめし頃に：」などで、現在に至るまでもトキワ荘について描き続けている。そして石ノ森は、トキワ荘や新漫画党の仲間の存在が、過激で刺激的な方向に走りそうになる自身の作風の抑止力になったこと、また、コンビで分担することで様々なジャンルを描き分ける藤子の存在がライバルとして意識されたことを明かしてい

る。そこからは、一つの方向性のみを突き詰めるのではなく、多様な表現方法、ジャンルを開拓していくことを目指す、その後の石ノ森の姿勢への強い影響も垣間見ることができる。／このように、トキワ荘や「漫画少年」は、単なるノスタルジーや想い入れのみならず、その後もそれぞれの創作姿勢や作風にも作用し続けたのであり、それが現代に至るまでのマンガ文化の隆盛にも連なっていたのである。

若き日の彼らは、池袋周辺を彷徨しながらマンガ家としての腕を磨き、戦後日本におけるマンガ文化の担い手として活躍するようになる。その活躍は、現在の池袋にサブカルチャーのイメージを植え付けることに大きく貢献していると思われる。

同じことは、（八）へ人吾坐（一九四八―一九六八）人の世をうつした映画の



図版 7

光」にもいえる（【図版7】展示パネルより）。同コーナーを担当した中村秀之氏（立教大学教授）は、その解説に、

人吾坐は、戦後二十年間にわたり、独創的な番組編成で映画通に支持された名画座である。池袋駅東口から護国寺方面へすぐ、現在の東京信用金庫本店ビルの位置にあった。開館は一九四八（昭和二十三）年二月、池袋ヤミ市の全盛期に当る。当時は目の前を都電（17系統）が走り、その通りの反対側には東口マーケットやミューズマーケットという連鎖商店街が出来ていた。豊島区の映画館はすべて空襲で焼かれてしまったが、すでに東口の日勝映画劇場や西口のシネマロサなど数館が興行を始めていた。／人吾坐の創業者は元朝日新聞記者で作家の三角寛、カメラ好きの三角が骨董屋から中古の映写機（シンプレックス）を購入したのがそもそのきっかけだったという。「文芸会館人吾坐」と称し、「文士経営」を謳って高名な文学者が株主に名を連ねた。三角によれば「坐」という字には「守る」という意味があり、「人吾坐」という館名に「人の世を守る」という願いを込めたという。定員は四五百名、当時の水準からいえば決して大きくはないけれど

も、堂々とした日本式建築の外観は銭湯と間違えられることもあったという。／当初、新参者の人吾坐は占領期におけるアメリカ映画の独占的な配給系統に食い込むことができず、ヨーロッパ映画の二番館ないし名画座としてスタートし、それを特色とした。その人吾坐が都内でも屈指の名画座として地歩を築くのは、一九五二（昭和二十七）年、三角寛の婿養子の三浦大四郎が支配人となり、独自の番組編成による二本立て興行路線を成功させてからである。以後、急成長を遂げ、板橋に弁天坐（一九五二年）、池袋駅東口に文芸地下劇場（一九五五年）と文芸坐（一九五六年）を開館し、株式会社人吾坐が合わせて四館を経営した。／一九六八（昭和四十三）年七月、人吾坐は、決して長いとはいえないけれどもフアンの記憶に深く残る歴史を閉じた。株式会社人吾坐は引きつづき文芸坐などを経営したが、その文芸坐も一九九七（平成九）年に閉館した。しかし、二〇〇〇（平成十二）年に新文芸坐がオープンし、「文芸坐」の名を引き継いだ二本立て名画座として、今も映画の光をともしつづけている。

と記し、人吾坐などの映画館が池袋に溶け込み、この街を

代表する文化産業になる過程を綴っている。

以上、(一)から(八)までのコーナーに加えて、展示室1では、パルコキノシタ氏によるライブペインティングも開催された。縦2m×横6mにも及ぶ巨大なキャンバスに向かい、一週間に上の時間をかけて池袋やミ市の光景を再現したこの絵画は、その圧倒的な迫力によって来場者の視線を釘付けにした

【図版8】展示会場を撮影した写真より。

また、同企画展では、前日を通じてNPO法人「としまの記憶」をつなぐ会によるギャラリートークが開催され、多くの来場者を集めた。同NPO法人は登壇者の語りを動画アーカイブ「記憶の遺産」として蓄積していく活動を進めているが、今回の企画がその取り組みに一役買うことができ嬉しく思う。



図版 8

### 3 展示室2

展示室2では、「戦後池袋の住人・江戸川乱歩が視た世界」というテーマで乱歩の遺品や資料を展示し、デジタル化された『貼雑年譜』、乱歩撮影八ミリフィルム上映、土蔵内部写真の公開をした。展示室1とはやや離れた場所に位置していたため、展示室2の存在に気づかずには帰ってしまいう来場者もあり、動線のあり方に課題を残したが、展示内容に関してはこれまで未公開だったものもあり、江戸川乱歩ファンの期待にも応えられたのではないだろうか。

こちらの展示を監修した落合教幸氏（立教大学学術調査員）によれば、江戸川乱歩が池袋に転居してきたのは一九三四年の夏、三九歳のときだったという。以後、一九六五年七月に七〇歳で没するまで、約三〇年間をこの地で過ごしたことになる。同氏は戦中戦後の江戸川乱歩について、「一九三九年、短篇集に入る予定だった『芋虫』が検閲にかかり、削除を命じられた。時局に合わない」とされ、乱歩は作品を発表できなくなっていた。／一九四一年から、乱歩は隣組の活動にかかわるようになる。昼間に家にいる男性が少なかったこともあり、防空群長として近隣を指揮する役を引き受けたのだった。その後、町会副会長に選ばれ、



事務作業もこなすようになった。作家として、それまでの乱歩は社交的とはいえない生活を送っていたが、この時期から非常に社交的になったといわれている。／立教大学の近くにある乱歩の家は、一九四五年の大空襲でも奇跡的に焼けずに残った」と記して、戦中の乱歩が隣組の活動などを通じてそれまでとは異なる「社交性」を獲得していたことを指摘している。

会場に入っていくなり目に飛び込んでくるのは写真家・薺田純一氏が撮影した旧江戸川乱歩邸の土蔵にある書棚の写真（縦二・三m×横三m）である。書棚の一段一段を撮影したあとそれぞれをつなぎ合わせて完成したその作品は、本の背文字までくつきり読むことができ、まるで本当に土蔵のなかを彷徨っているような臨場感をたたえている。薺田純一氏は「江戸川乱歩の書架 蔵 北棚その一」というタイトルを付けたその作品について、「私の友人の作家に聞いた話です。カッシーラーの説とのことですが、古代ギリシャでは、ベッドに寝て朝起きたときに残っているシーツの皺は、そのままにしておくという習慣があったそうです。シーツに残る痕跡には、寝ていた人の魂が付着しているから乱してはいけなかった。これはどこか日本の「形代」の考え方にも似ています。／書棚もそんな「形代」

のようです。書棚のたたずまいや、納められている本からその人を知ることが出来る。ある書棚は雄弁にその人の思考を語り、またある書棚はその人の性格を控え目に現すかもしれません。／この書棚は、旧江戸川乱歩邸の蔵にある棚です。蔵に入って左に曲がりその背後、北に面した棚です。北川の書棚は二つあるのですが、乱歩が収集した海外の推理小説の原書が多く並んだ一つ目の棚です。日本の推理小説の父・江戸川乱歩の何かをこの写真からくみとっていただければ大変うれしく思います」と述べている。

江戸川乱歩関連の書籍としては、（一）「二銭銅貨」などの短編を収めた最初の単行本『心理試験』（一九二五年）、娯楽性の強い大衆小説を書き始める転機となった『蜘蛛男』（一九三〇年）、（二）戦時中に刊行できなかった探偵小説を、戦後になって刊行（一九四六年～一九四九年）した紙質の悪い仙花本、（三）『怪人二十面相』（一九三六年）以降に書き始めた少年もの（戦後の乱歩は、光文社の雑誌『少年』で連載を再開する。シリーズは『青銅の魔人』（一九四九）から、昭和三七（一九六二）年の「超人ニコラ」（『黄金の怪獣』）まで続いたが、単行本の出版は、講談社から光文社を経てポプラ社へと移っている）などを展示した。

紙媒体資料としては、(一) 戦時中、町会活動に加わった際、乱歩自身が作成した各種の連絡事項や配給表、(二) 戦後に大量の洋書を読み漁って知識を蓄えた乱歩が探偵小説に登場するトリックを集めた「トリック分類表」(のちにそれをもとに「類別トリック集成」として書き直し、評論集『続・幻影城』[一九五四年]に所収) などをご覧いただきたい。また、本展示では乱歩が自分に関する記録や記事などを収集したスクラップブック『貼雑年譜』(全九巻、第一巻は一九二八年まで、第二巻は一九二九—一九〇年まで、第三巻は戦時中、第四巻以降は戦後の記録を扱っている) も出品された。

そしてもうひとつ。本展示で初めて一般公開されたのが江戸川乱歩撮影のムービーカメラ(九・五ミリ、八ミリ、十六ミリ)映像である。乱歩は映像に強い興味をもち、戦前から映写機や編集機材を購入して撮影・編集を行っていた。残された映像資料には、家族旅行や日常生活の光景、探偵作家たちとの集いなどが映っており、いまとなつては非常に貴重な資料となっている。

## 4 おわりに

以上が東京芸術劇場で開催された展示会の詳細である。

会期を通じての入場者数は四、二七六名。DVD、CD、各種書籍・雑誌の物販も行ったほか、月刊『東京人』九月号(八月三日発売)、『婦人之友』(七月一二日発売)、『明日の友』(八月五日発売)での告知・関連記事掲載をはじめ、テレビ、新聞などのマスメディアにも大きく報道された。ここにその概要と関係者のお名前を記して感謝の意を表したい。

### 戦後七〇年企画

「戦後池袋―ヤミ市から自由文化都市へ―」  
会期：二〇一五年九月一四日(月)～二二日(火・祝)

会場：東京芸術劇場 五階 ギャラリー1・2

監修：石川巧(立教大学教授／ギャラリー1)、落合教幸(立教大学学術調査員／ギャラリー2)

アートディレクション：松蔭浩之

展示資料解説：石川巧(立教大学教授) 石樽督和(明治大学助教) 落合教幸(立教大学学術調査員) 中村秀之(立教大学教授) 永吉洋介(映写技師) 初田香成(東京大学助教) 山田夏樹(法政大学助教) 吉田いち子(NPO法人「としまの記憶」をつなぐ会) 菅田純一(写真家)

写真撮影：五十嵐隼一郎 伊藤雄一 神田麻美(映写技

術者) 高木進一 永島浩二 黄庸夏 山中慎太郎 (フォトグラフアー) 松井一彦 菅田純一 (写真家)

VTR制作・編集・吉田雄一郎

展示制作・澤田剛治 (株式会社フジサワ・コーポレーション)

展示協力・渡部裕太 (立教大学大学院文学研究科博士課程後期課程)

ライブペインティング・パルコキノシタ

ギャラリートーク監修・NPO法人「としまの記憶」をつなぐ会

事務局長・近藤泰樹

また、本展覧会の開催にあたり多くの方々からご協力を賜った。〔敬称略、五〇音順〕

板橋区立郷土資料館 江戸東京博物館 株式会社奥田商会 桐本国次 株式会社社光文社 国土地理院、後藤英夫 新文芸坐 鉄道博物館 東京国立近代美術館フィルムセンター 東京都建設局 豊島区立郷土資料館 豊島新聞社 平井憲太郎 布施川一雄 三浦大四郎 矢島勝昭 立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター 立教大学メディアセンター

池袋Ⅱ自由文化都市プロジェクト

主催・「池袋Ⅱ自由文化都市プロジェクト」実行委員会 (豊島区 東京芸術劇場 (公益財団法人東京都歴史文化財団) 立教大学)

後援・豊島区観光協会 池袋西口商店街連合会 立教大

学校友会

特別協賛・ホッピービバレッジ株式会社 株式会社シン・コーポレーション 株式会社メロ・ワークス 株式会社第一興商 一般社団法人日本音楽健康協会 巢鴨信用金庫

協力・NPO法人ゼファール池袋まちづくり 公益財団法人としま未来文化財団 都市出版株式会社 株式会社婦人之友社 新文芸坐 池袋演芸場 一般財団法人光文化財団 ミステリー文学資料館 一般社団法人落語協会 NPO法人「としまの記憶」をつなぐ会 NPO法人としまNPO推進協議会 東日本旅客鉄道株式会社池袋駅 東京地下鉄株式会社池袋駅 東武鉄道株式会社池袋駅 豊島立教会 立教学院展示館 立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター 立教大学ESD研究所〔順不同〕

助成・平成二七年度文化庁 文化芸術による地域活性化

## 化・国際発信推進事業

注記 本稿は、展示企画「戦後池袋の検証——ヤミ市から自由文化都市へ——」の内容を報告することを目的に書いたものである。展示解説の内容を尊重するために、各コーナーの紹介に際しては、解説を担当した初田香成、石樽督和、中村秀之、山田夏樹、落合教幸各氏の言説をそのまま引用することにした。また、同展示の詳細は「戦後池袋——ヤミ市から自由文化都市へ—— 展示資料解説」(「池袋Ⅱ自由文化都市プロジェクト」実行委員会、二〇一五年九月一〇日、ひつじ書房)に記録されている。本稿の写真は事務局長の近藤泰樹が撮影したものである。

(立教大学文学部教授)